

森有正著「思索と経験をめぐって」講談社学術文庫、講談社 1976年7月10日刊を読む

「フランスの教育」から考える

はじめに

フランスの教育で要点となっているところは、知識の組織的集積と発想機構の整備の二つにしばることができると思う。

1. (1) **知識の集積**という、言うまでもなく記憶が主要な役割を果たす。そしてそれは実に徹底している。

①たとえば中等教育の**歴史科**をとってみると、先史時代から現代まで、第六学級から卒業までの七年間に実に膨大な量を注入する。

②教科書の量から言うと、大判の頁にギッシリつまった本文二千頁を優にこす分量を生徒は憶えなければならない。

③ただその知識が、内容を省略せずに、各時代の主要問題、政治、外交、経済、社会、文化を中心に、いわゆる合理的に整理配列され、しかも非常に頻繁なコントロールや宿題、さらに作文によって生徒自身の表現能力との関連において記憶されるようになっている。総合的な人間力を養うためには、子どもと遊ぶ機会をできるだけ多くし、保護者の人たちと忌憚なく話し合う場を設ける努力をしなければならない。

(2) これは他のすべての課目においても同様で、**数学や自然科学にまで作文が課される**。こうして実に膨大な量の知識が組織的に蓄積される。日本の中高校の教科書と比べてみると量だけでもまさに一對五くらいである。

(3) ことにその記憶そのものが合理的に統制され、たえずコントロールされている有様を見ると、記憶が単に受動的な機能ではなく、発想機構と密接に結びついた積極的機能であることが前提とされているのがわかる。

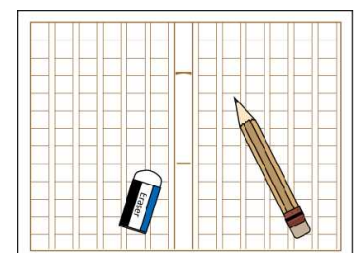


2. (1) **発想機構の整備はフランス語の授業で集約的に代表される**。

①これは小学校入学から中等教育の終了、すなわち**バカロレア**の試験まで、全教科の中心的な位置に置かれて組織的に遂行される。

②その眼目は、**読み理解することよりも書くことに集中される**。そのために**語彙**、**文法**、**作文**が低学年から教えられる。

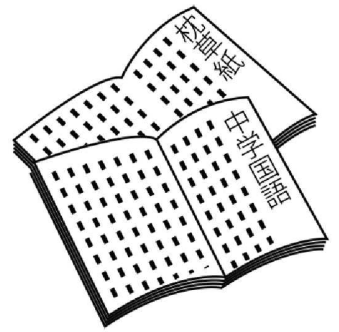
③方法は、まず**徹底的に分析的**であり、**語彙は一語一語吟味**され、その**定義と正しい用法が練習に課され**、**文法は細則にいたるまで作文によって訓練される**。



(2)①^{とくほん}読本の読解ももちろん行われるが、それは作文のための例文のような観を呈している。

②学年が進むと文法的分析に論理的文体論的分析が加わる。

③そして作文は、いつも、全体を総括的にコントロールするものとして、中心的位置をしてめいる。



(3)①英語、独語、イタリア語、スペイン語等の外国語、それからことにラテン語、ギリシア語等の古典語が、フランス語との緊密な関連のもとに教授され、ラテン語、ギリシア語、フランス語はたいていの場合、同じ教師が教えている。

②ぼくはそういう教師を何人か知っているが、かれらの自国語に対する熱意とその知識には頭が下るばかりである。

③高学年になると、フランス文学史の著名な作家の研究が始まるが、その方法は、一貫して同じで、徹底的分析と作文による総合が訓練される。



3. (1)歴史、地理、公民科なども、作文が最後のしめくりになるので、同時にフランス語の教科としての役割をも果たしているのである。

(2)そうして文科系では最高学年に哲学が課され、思考の訓練が行なわれる。

(3)自己の思索を实践発表する発想機構は最後まで開発習練を受ける。



4. (1)ある意味で、フランスの教育は秀才教育であるとも言われよう。

(2)①優秀な生徒はどしどし自己を開発して進歩していくが、鈍才は落伍するか、辛うじてバカロレアを通るということになる。

②ことに現在は科学の進歩にともなって教えることがあまりにも多くなり、生徒の負担が重すぎるという批判がつねにきかれ、古典語の廃止などもしばしば問題になる。

③またほとんど無視されている体育や情操教育をもっと重視せよとの意見もある。

(3)しかし結局それは枝葉のことで、教育の中心課題が知識の組織的蓄積とそこから自己の発想を行うという眼目に置かれていることは少しも変りがない。

5. (1)つめ込み主義の教育が誤りであることは明らかである。

(2)①しかし自分が本当に思索しうるためには膨大な、正しく吸収された知識(ということは、いつでも正確に言葉や文章にして発表しうる知識)を持つことが必要であることは同様に明らかである。

②これは一面では生徒の素質にもよる。



③このような知育を重視することが優秀な生徒にはよい結果をもたらしても、同じことが劣等な生徒には卑なるつめ込み教育以下の効果しか生じない。

- (3)①それで、ついて行けない生徒は、自分に適した仕事に転じて行く。
②それでよいと言えば、それまでだが、ここにもフランスの教育の一つの問題がある。
③ただそれにもかかわらず、**教育の水準を落すまい**とすることは、つねに第一の関心事になっている。



6. (1)①以上述べたことは、しかしながら、まだ大学生にもならない生徒の問題である。
②しかしその教育を見ていると、**人間の中心課題である経験と思考、伝統と発想との問題**がその構想の大きい骨組になっていることがわかる。
③そのことを言いたかったのである。
- (2)ある一つのことば、概念、あるいは課題について何か言うことは、それについて何か心に浮ぶ感想を述べることではない。それについての**正しい知識**、さらに適切に言えば、**自己の経験**がそのことばや観念の定義を構成するにいたる時、われわれははじめて**意味のある発言**をすることができるのであり、その**発言は同時に行為の形をもとりうる**ものである。
- (3)こういう人間についての基本的なことがらがその教育の根底にある。

P20 ~ 23

<コメント>

「論述式入試に向けての思考力・表現力の育成」が日本でもようやく訴えられ、現実の取り組みとして議論・実行が迫られています。この原形がフランスの国内バカロレアであることは、少しずつ知られてきました。フランス哲学者の森有正先生の名エッセー「遥かなノートル・ダム」に収められている「霧の朝」と題する一章にあるこの文章から、フランスの教育について学ぶことは大きいと考えます。もし本格的に「論述式入試に向けた思考力・表現力の育成」を目指すのであれば、ここに紹介されたフランスの教育カリキュラムの研究は避けられないと確信します。

ではどのように行えばよいか、これからじっくり考えて参りましょう。

2021年6月7日(月)林明夫

